

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年6月1日(第1241号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306

協会

表彰式・第82回定時総会

秋田県建設業協会は5月26日、表彰式並びに第82回定時総会を秋田キャッスルホテルで開催した。

表 彰 式

定時総会に先立ち、表彰式が執り行われ、(一社)秋田県建設業協会、(一社)全国建設業協会、(公財)建設業福祉共済団、(一社)全国土木施工管理技士会連合会における表彰者名の受賞が披露され、各賞の代表に対し、表彰状並びに記念品が授与・伝達された。

各団体・各条項における受賞者数は次の通り。



(一社)秋田県建設業協会

表彰規程第4条 (会員企業)	16社
表彰規程第5条 (会員企業の従業員)	27名
表彰規程第6条 (正会員の職員)	3名

(一社)全国建設業協会

表彰規程第2条4号 (特別功労:会員企業の役員)	5名
表彰規程第4条1号 (会員企業)	4社
表彰規程第5条 (会員企業の従業員)	10名

(公財)建設業福祉共済団

個人の部	5名
------	----

(一社)全国土木施工管理技士会連合会

表彰規程第3条2(1)イ (役員)	1名
表彰規程第3条2(2)二 (職員)	2名
表彰規程第4条第2項 (優良工事従事技術者)	2名

第82回定時総会

表彰式終了後、第82回定時総会が開会され、会員及び関係者約120名が出席した。

冒頭の挨拶に立った村岡淑郎会長は、「国の経済全体に明るい環境変化が生じている」と昨今の経済状況に触れ、「公共投資の迅速で効率的な執行が強くと求められる一方、台風や豪雨など自然災害の頻発により、防災・減災対策や社会資本整備の重要性が再認識されている」と述べ、公共事業予算の確保拡大、建設産業の担い手育と確保が重要な課題になる中、「『建設業協会ビジョン』を基に魅力ある建設産業の再生と地域建設業の活性化に取り組んでいる」と述べた。

続いて、小池剛東北地方整備局長が登場し、「今年度の予算は震災復興の加速、国民の安全安心の確保、経済の活性化を柱として編成した」とし、更に、被災地と他の地域のバランスが取れた経済振興を図っていくことを述べた。

次に登壇した石黒互秋田県建設部建設技監は「建設業の活力は地域を測るバロメーターである」と述べ、秋田県において▽労務単価や低入札基準価格の見直し▽担い手確保対策などを進めていることを紹介した。

来賓祝辞の後の議事では、25年度における財産の状況、事業報告、また、26年度事業計画・予算が審議され、全ての議案が承認・可決された。



議案

- 第1号議案 平成25年度貸借対照表及び正味財産増減計算書及びこれら附属明細書承認の件
- 第2号議案 平成25年度事業報告及び事業報告の附属明細書報告の件
- 第3号議案 平成25年度公益目的支出計画実施報告書報告の件
- 第4号議案 平成26年度事業計画及び収支予算報告の件

県協会

新規学卒入職者研修会を開催

二日間にわたって社会人・企業人としての心構えを学習

県協会では、平成26年度新規学卒入職者（新入社員）研修会を5月29日と30日、秋田市の秋田県青少年交流センター「ユースパル」において実施した。

昨年度までは、春と秋の一日のみの研修会だったが、本年度は新たな試みとして、集団行動、集団生活を通じ「個人と集団」「礼儀と節度」等の社会的ルールを身につけるとともに、各種行動に適応できることを目的として、泊りがけの二日間にわたる研修会を開催した。

会員企業にこの春採用された新規採用者は、昨年度比7人減少の93人。このうち57人がこの度の研修会に参加した。

研修会の初め、加藤憲成副会長が挨拶し、「建設業を取り巻く状況は少しずつ上向いてきているが、建設業就業者の減少と高齢化の問題、若年者の入職の減少や技能者不足による技能・技術の継承、新卒者の入職率の低さと離職率の高さから若年労働力の人材確保・育成が重要課題となっている。建設業はただ単に公共事業を受注するだけではなく、災害が起こった時のライフラインの確保や復旧活動等、常に地域の安全・安心を守る業界として欠かせない産業である。秋田県のこれからの建設業は自分が背負っていくという気概をもって前に進んでいただきたい。働くことは難儀なこと、仕事で楽なことはひとつもない。簡単に離職を考えず早く職場や仕事に慣れ、先輩や同僚とよくコミュニケーションを取りながら

楽しく仕事をしてほしい」と述べた。

引き続き、堀井啓一副知事の講話があり、「まずは建設業に入職されたことに感謝する。私自身、工事過程の多くの苦労を思うと、完成した道路や河川を使う際に、思い入れを感じる。常に現場を大切にし、そこに生きがいを感じて欲しい」と研修生に言葉を贈った。

研修では、富士教育訓練センターの花輪孝樹氏と菅井文明氏を講師に迎え、一日目は、社会人としての責任と義務、挨拶行動、ビジネスマナー、労働安全衛生についての講義とグループ研究の演習。二日目は、ラジオ体操から始まり、「仕事に取組む決意」、「実践話法」「スピーチ」「他己改善と自己活性化法」の演習が行われた。



秋田・鉄路の情景

Vol.
19

「ここにも鉄道遺産」

抱返り溪谷・神の岩橋



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

今年は例年になく早いペースで猛暑の日々がやってきていないだろうか。暑いというだけで体力も奪われ、仕事もはかどらない。そよ風の吹き渡る木陰でのんびり涼みたいものだ。

秋田で初夏から紅葉シーズンにかけての気軽なハイキングコースといえば、仙北市の抱返り溪谷も挙げられる。

抱返り神社前に車を停めて、吊り橋で対岸に渡り、回顧(みかえり)の滝まで徒歩約30分の抱返り溪谷遊歩道は、未舗装ではあるもののほぼ平坦で歩きやすく、南側に迫る山塊が木陰をつくるため、ちょっとした納涼スポットにもなっている。眼下には独特なコバルトブルーの玉川の流れ、岩をくり抜いた素掘りのトンネルやスリリングな木橋もあり、なかなかアトラクティブなハイキングコースだ。

実はこの遊歩道自体が、かつての森林軌道の跡だ。大正年間に、溪谷上流部から木材を伐り出して溪谷下流部の貯木場まで運ぶためのトロッコ軌道が敷かれた。貯木場からは木材を筏に組み、玉川に浮かべて運んだようだ。

のちに田沢湖線(当時は国鉄生保内線)が開業すると、木材の搬出も筏流しから鉄道輸送に切り替えられることになり、神代駅横に新しい貯木場をつくり、溪谷を対岸に渡る吊り橋を架けてトロッコ軌道の線路も付け替えた。

さて、ここまでは資料をひもといて時系列で理解できるのだが、一つ疑問なのは、人が渡るだけでも結構揺れる吊り橋を、木材を満載したトロッコ列車が渡れるものだろうか、ということ。

これも、さらに調べてみて分かった。この生保内林用軌道では、動力車を導入したことは一度もなく、木材を積んだトロッコ一両ごとに人がつき、人力でそれを押したり、あるいは下り勾配では人がトロッコに乗り、手動ブレーキで速度を調整しながら重力に任せて走らせるという運行方法だったようなのだ。

あの、抱返り溪谷のシンボルである赤い吊り橋を、昭和20年代までは木材を積んだトロッコが行き交っていたのだ。神の岩橋は、完成した大正15年当時、日本で最長の鉄道用吊り橋だったそうだ。

ふるさと

あゆかわのぼる

明け方に目覚めたら唐突に「“羽川”に行かなきゃ」と思った。羽川は私の生まれ故郷である。何か虫の知らせがあったわけでも特別の理由を思い付いたわけでもない。

実家はもうすでに両親も兄夫婦もいなく、甥の代になっているので、特別の用事がある時以外は訪ねる事もあまりない。次兄一家が住んでいるが数年前に中^{あた}つて、それ以降老人介護施設に入ってゆっくり過ごしていて、弟としてはそれ程心配していない。

羽川は、今年の春、少し話題になった。クリスマスローズという花である。数年前、集落の有志が寺の裏手の斜面を耕してその花を植えた。寺とクリスマスローズという mismatch 風を私はクスリと笑ったが、すこしづつ面積を広げ手入れを続けてきたらしく、今年はその様子がメディアで紹介された。先日別の用事でふるさとの後輩に電話をした時にその事も話題になり、報道以来見にくる人が増えたと言っていた。羽川に行きたいと思ったのはその事が頭の隅にあったせいかもしれない。

クリスマスローズが咲き乱れているという寺は如意山珠林寺という古刹である。羽川は由利十二頭の一人で新田義貞の一族の羽川小太郎という武将が治めた所である。この事は海音寺潮五郎の歴史小説『羽川殿始末記』（『剣と笛』新潮文庫所収）に詳しい。珠林寺は羽川氏の菩提寺で小高い森の中腹の杉林の中にあり、向き合うように、別名を葦山城と呼ばれた羽川氏の館があった。今も古の兵どもの夢をうかがえる跡があり、そこが地元の人々によって紫陽花やツツジが植えられ、さらに平成元年に秋田市の市制百年を記念して桜を植え、今は『羽川新館公園』として集落の人々に護られ愛されているようだ。さらに少し離れたところ、かつて羽川油田全盛期の頃の石油会社の事務所があった近くの雑木林が「古館」と言われた。雑木を伐り倒せば姿を表すかもしれないが、今は、その跡を確認する事は難しい。知ったかぶりで蛇足を加えれば、新館を葦山城と称したのはもちろん新田義貞の一族という事からであろうが、事実葦を植えたようで、子供の頃、館跡の西側の斜面に葦を採りに行った記憶がある。

珠林寺の裏手から登る小高い森を築紫森（正式には和尚森と言うらしいが集落の人々は築紫森と言った）といい、標高100mほど。頂上までの杉と雑木で薄暗い山道には西国三十三番の石仏が並び、頂上に辿り着く

と360度のパノラマ。羽川が一望でき、日本海は鳥海山から男鹿半島まで見渡せる。集落を蛇行し日本海に注ぐのが鮎川。海音寺潮五郎が小説の冒頭部分に、「羽川はこの鮎川に沿って発達した、ふんどしのように長い一筋町だ」と書いている。その川が私のペンネームの由来である。

秋田市の重要文化財になっている『羽川剣囃子』は、羽川氏が戦勝の宴で舞ったのが始まりといわれ、代々継承され、秋の祭りには集落を山車と梵天が練り歩き、この舞が披露される。最近はずっかり人気で、いろんなイベントから声が掛かっているようだ。

生まれ故郷に車を走らせた。新館公園の桜はすでに葉桜となっていて、ツツジが咲き始め、紫陽花はまだ蕾、クリスマスローズは盛を過ぎ色あせていた。

私の生まれた秋田市下浜地区は、昭和30年代の昭和の合併前は由利郡下浜村。羽川地区が中心だったが国道7号沿いの長浜、新屋に近い桂根、羽川からさらに山手に入って名ヶ沢、一山越えて八田。これで下浜村。

年寄りじみた話になるが、私が中学生の頃、昭和の合併の頃だが、一学年が70人余り。全校で200人を超えていて、部活は体育も文化も何でもできた。それでも当時はまわりの中では中規模校だったはずだ。ところが、今年の春、母校の中学校によばれてPTAの集まりに話をしに行ったところ、校長先生が「全員が出席して下さい48人なのですが…」とおっしゃる。油断していた。私たちの頃の5分の1ではないか。部活は男子が野球、女子がバスケット、それに吹奏楽、という。これで中学教育の現場なのか。そう憤ったらもっと怖い話が出て、ここ何年か毎年5人ほど減っているという。そしてそのペースが早まっているらしい。それではこの後10年しないうちに生徒がゼロになってしまうではないか。わがふるさとに中学校がなくなってしまう。それはそのまま下浜の存亡にかかわる事だ。かつてのマリンリゾートの下浜が。

私は、新館公園の四阿のベンチに座り、目を瞑った。

そして唐突に思い付いた。あの羽川剣囃子をここで舞ったらどうか。かつて一度やった事があるという。わが生まれ故郷には確か創作太鼓がある。ここに集落の人々が集い、剣囃子を舞い創作太鼓を打ち鳴らし唸喊の声を上げる。そしてやがてそれをきっかけにして県内の剣囃子剣舞を招いて剣舞フェスティバルを挙げる。恒例化して全国に呼び掛けるまでやってみる。

ふるさとが蘇るのは難しいかもしれないが、血をたぎらせる事は可能かもしれない。

そうだ。ふるさとの後輩たちをけしかけてみよう。